
ある婦長の独白

紅月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある婦長の独白

【Nコード】

N8025J

【作者名】

紅月

【あらすじ】

あるひとりの少女の独白（短編）の続編です。少女が働く屋敷の婦長は、少女の仄暗さに気がついた。気が付いて見て見ぬふりをした。（誰が罪深いかですか。それは神のみが知ることです。ごまきしょう）

(前書き)

『ある少女の独白』を読まれたほうが、話をつかみやすいとされます。

これからよろしくお願い致します。

招き入れた少女の目を見たとき、わたくしは一瞬、おぞましいものを屋敷に入れてしまったような気が致しました。それは一瞬のこととございました。彼女は痩せてはいましたが、鶏がらのように細くもなく、臭いもせず、何より礼儀正しかったのです。ああ、あの悪寒は杞憂だった、とわたくしは思いなおし、改めて彼女を他の侍女たちに紹介したのです。小さく笑んだ少女は、幼さがあるものの大人びておりました。

ええ、ええ、勿論です。彼女は努力家でした。最初こそ失敗は多かったものの、炊事、掃除、マナー。精いっぱい覚ええました。今まで教えてきた者の中で、一番覚えがよかったのではないのでしょうか。わたくしは彼女に教えるのが楽しくて仕方ありませんでした。少女は素直で、スポンジに水が染み込むように物事を吸収していくのです。

あるとき、何でだったかは覚えておりません。

そっちは違う道だ、と彼女の腕ではなく、掌を掴んだのです。わたくしは言葉をなくしました。表情ではいつもの顔を作っていたものの、冷や汗が浮き出たのを、少女は気づいていたでしょうか。気づいて欲しくはありませんが……。彼女の掌は、わたくしがそうも驚くほど硬く、ざらついておりました。わたくしはその手を知っておりまして。わたくしの息子が軍隊にいたのですが、その息子と同じような手をしていたのです。家事で手が荒れた、というわけではなく、鍛え抜かれて肉刺ができた、戦いの証なのです。

少女はなにげなくわたくしの手からすりぬけて、いつも通りに振舞いました。いつも通りでした。わたくしだけが、白昼夢でも見たのだろうかと思うぐらいには。ですがわたくしには、あの硬い手を忘れることができませんでした。

それでも彼女はお屋敷で働いておりました。少女がわたくしたちに危害をくわえるわけではないだろう、と思ったからです。浅はかでしょうか。でも彼女はちゃんとした労働ギルドに署名して職を探していた、国籍持ちです。もしかしたら、どこか遠い国で兵役されていたのかもしれないと思うことにしました。

ところがその夜、少女は忽然といなくなりました。

それは夜中のことです。彼女は時折、買い物に出かけたときに寄り道をしていました、そう言って、遅くに帰ってくることがありました。そのときは心配だったので叱ったものの、彼女はわたくしたちにお土産を渡して、これを買いたかったのです、と笑った。それは並ばなくては変えないと評判の、おいしいパンでした。それで許してしまった、というのも現金な話ですが、彼女が潔白の身ならば、仕事にさしかえなければ少々遅くなっても構わないのではないかと思いました。彼女も若いですし、他人との付き合いもあるのでしよう、と。

しかし彼女が真夜中にいなくなることは初めてのことでした。わたくしはたまたま、見回りをしているときに、下宿しているはずの彼女がゆつたりとした足取りで庭を出て行くのを見てしまったのです。さすがに夜中は危ない、止めなくてはと思い、すぐに追いかけました。……追いかけたつもりです。ですが門を出たときには、すでに彼女の姿はどこにもありませんでした。足音も、何も。悪い夢

でも見たかのようにです。そう思ったら、嫌な考えが色々と巡りました。彼女は一体何をしているのだろう、と。かわいがっている少女を疑ってしまいました。

どうしたものか、わたくしは悩みました。探しに行くべきだろうか、と。放っておいても朝には少女が帰ってくる、そんな気はしておりましたが心配だったのです。お節介ともいいましょうか。しばらく考えておりましたが結局屋敷に戻りました。どうしようもなく怖かったのです。何かを見てしまうような気がして。

ですがわたくしはその夜眠れませんでした。自分に宛がわれた小さな部屋の椅子に座り、ずっと庭が見える窓のそばにいました。

3時を過ぎたあたりでしょうか。門のところに、ちらりと影が見えました。ああ、あの子だ。そう思ったわたくしはすぐに外へ飛び出しました。少女はわたくしの顔を見たたん、いつも通りに笑顔を浮かべました。いつも通りでした、幸せそうな、ささやかなものに満足するような笑顔をわたくしに見せたのです。それで安心してしまいました。彼女を抱きしめて、どこへ行っていたの、心配したんですよ。そう言えば、少女は困ったように微笑みました。少し疲れたような顔をしていました。

心配をかけさせて申し訳ございません。ですが、どうしても行きたいところがあったのです。”思い残したものがあったのです。今日ではないといけませんでした。お許しください、これが”最後”ですから。

そう呟いた彼女を、わたくしはどんな顔で見ていたでしょうか。少女はのりくらりと質問をかわしました。訊いたものの、結局わたくしは彼女がどこへ何をしに行っていたのかを知ることができま

せんでした。しかし彼女が無事ならそれでいい、と屋敷の中へ入ることにしました。少女の肩を押して、屋敷の扉を開けました。そのときです。ふわり、とかぎ慣れない臭いが鼻をかすめました。少女はいつも無臭でした、香水もつけることなく、そのままでした。だつたらさっきの臭いはなんだつたのか。扉を開けた、一瞬だけ臭つたものは……？不安を掻き立てるような臭い。とまどつたのがわかつたのでしょうか、少女はひとりと歩みを止めました。

振り向いた少女の目を見た瞬間、わたくしは息をつめました。これもまた一瞬のことでした。ぞつとするような仄暗い光をやどす目でした。夜だつたからなのでしょう、不気味に思えて仕方ありませんでした。ああ、ごめんなさい、指先が震えて仕方ないです。あとき確かにわたくしは、2回目の、何か、そう、おぞましいものを屋敷に招いたような感覚に陥つたのです。

どうかなさつたのですか。

静かなその声にはつとしました。少女を見ても、悪寒など感じません。少し風邪を引いてしまつていたのでしょうか。ええ、きつとそうなのです。だから肌が寒い気がしたのです。わたくしはふたたび、少女の肩を押して夜の廊下を歩いて行きました。

訊きたいことはそれだけですか？

なんだつて、あの子のことを訊きたがるのですか。確かに、さきほども言った通り、不自然なこともございました。しかしそれだけ、夜中に一度出かけたというだけです。彼女は潔白です。今も素晴らしい働きをしてきているのです。わたくしが感じたものは杞憂で

しょう、そう言っておりますのに。

……そうですか、言い訳に聞こえますか？それもそうでしょう、言い訳をしていますもの。気付いていないふりをしていた、それだけのことでございましょう？ああ、その銃をどけてはくれないものでしょうか。

わたくしは殺されるのですか。あなたがたが言った通りに、わたくしが見たことを、お話を致しましたでしょう。満足はしていただけないのですか。全部知っていたのかって？知っていたのはあの子の暗い部分だけでございます。それこそ、わたくしをここへ連れてきたあなたがたのほうがご存じでは？

いいえ、わたくしはあの子が好きですよ、あなたがたが言うように、ひどいことをしていても。長く一緒にいると、可愛く思えてくるのです。ひどいこと、ですか……ならば、それを見て見ぬふりしたわたくしは、どれだけ罪深いことでしょう。ひどいこと。それを知ったら、わたくしはあの子を嫌うと思ったのですか。いいえ、いいえ。違います、怖いとは思いますが、それだけです。

だって、このくたびれた街では、よくある話でございましょう？

あなたがたの話が本当ならば、あの子はここに来るでしょう。もしかしたらわたくしも殺されるのかもしれない。ですが、誰が怨むことができますよう。わたくしはあの子に少なからず、そう、今、助けを求めているのですから。

……？あら？どうしたのですか、黙って……。

ああ、来たのですね。わたくしの可愛い子。

ねえ、早くお屋敷に帰らなきゃだめよ。1時までには帰らなければ、

旦那様にどやされてしまうわ。

え？そう……わたくしを助けに来てくれたの……。

わたくしの為に銃を持ってくれたのね。ならわたくしたちは共犯
だわ。そうでしょう？最後にするって言ったこと、きつとその銃の
ことでしょうか？

ごめんなさい、ありがとう、大好きよ。

うふふ、そうね、あなたの言うとおりだわ。

”このこと”はわたくしただけの秘密にしていましよう。
そうよ、よくある話、ですものね。

本当はね、最初からわかってはいたのですよ。それでも色々な人
を見てきたつもりですもの。でもね、灯りの中で仄暗さを見つけて
しまえば、それが気になつてしかたないの。ねえ、そうでしょう？

さあ、帰ったら皆に謝らなくてはね。パンを買って行きましよう。

（後書き）

語り口調の話は書いていて楽しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8025j/>

ある婦長の独白

2010年10月15日19時22分発行